言葉に花の香気を生かし心に笑窪を宿す人

田澤ちよこ第二詩集『四月のよろこび』に寄せて

鈴木比佐雄

1

人には生涯で語ってはならない胸に秘めた情景があるのだろう。田澤ちよこさんの第一詩集『ロシア向日葵の咲いている家』を初めて読んだ時に、七十年もの時間がタイムスリップして、かつて満州に存在した田澤さん家族の別れの情景に引き込まれてしまった。きっと田澤さんには、語ることがためらわれるのだが、家族の懐かしい思い出があり、いつしかその父と花の情景を詩として再現したいと願っていたのだろう。

ロシア向日葵の咲いている家

思い出は
背の高いロシア向日葵
とび跳ねても　顔より大きい花に届かない
鮮やかな真黄色の縁どり
ギザギザの刻みのついた葉っぱ
棘々ある茎
玉石を敷き詰めた門までの小道に
ロシア向日葵は並んでいた
朝は父の見送り
ロシア向日葵のそばを通り抜け
木柵の門扉のところまで行くと
迎えの当番兵が礼儀正しく挙手の礼をする
軍帽を正し　白い手袋を嵌め
馬に跨り　父は
かつかつと蹄の音を残して出掛ける
角を曲がるまで
若い母は赤子を抱き　じっと立ち

幼い子ども達は　はしゃいで
お馬のうたを歌う
――はいし　はいし　はしれよ　仔馬（こんま）
向日葵のわきに涼み台がある
朝顔の蔓が棚になって這い　垂れ
大人の拳ほどの巨輪の花は
薄紫に朝から夕まで開いて　ひらひら動く
そこは
砂場遊びの日蔭　鬼ごっこの隠れ場所
父が戦場に征く前日に
家族五人が揃った最後の写真の背景

もう誰も知っている人はいない
幼い妹達にも記憶がない
今は歴史となった満州の
わたしの思い出だけに残る幼時（ようじ）の家

01年7月5日

田澤さんは一九三五年に長女として誕生した。若い父は関東軍の将校であったのかも知れない。田澤さんが四歳の時に父が向かった戦場は、一九三九年の満州国とモンゴル国境の「ハルハ河」周辺で繰り広げられたノモンハン事件だろう。関東軍は少なくとも一万九千人の死傷者が出たと戦史には記されているらしい。ソ連の崩壊後に出た資料では、ソ連も二万四千人程の死傷者が出たらしい。日本は中国戦線、ソ連はヨーロッパ戦線に兵力を向けることになるので、その年に停戦となったソ連・モンゴル軍と日本・満州軍のハルハ河を挟んだ国境紛争だった。日本は第二次ノモンハン事件で圧倒的なソ連の戦車部隊などに火炎瓶で戦い多くの死者を出した戦争だった。ただソ連も第一次ノモンハン事件に日本の空軍力や日本兵の肉弾攻撃などによって相当な被害があった

らしい。後に「ソ連邦英雄」の称号を与えられたジューコフ元帥は「日本軍の下士官は頑強で勇敢であり、青年将校は狂信的な頑強さで戦うが、高級将校は無能である」と語ったという。ジューコフ元帥は戦車五〇〇両以上、航空機五〇〇機以上、数万人の兵士を導入して関東軍の第二三師団などに壊滅に近い損害を与えた。ジューコフ元帥が晩年に米国の歴史学者に取材されて最も困難な戦争は何だったかを尋ねられて時に、独ソ戦ではなく「ハルハ河」の戦いを挙げたという。それほどこの戦争が筆舌に尽くしがたいものがあったのだろう。ジューコフ元帥が実行した機械化部隊の機動的な戦術の導入は、敵対するドイツがポーランドやフランスに侵略する際にも用いられた。日本はなぜソ連との戦いに敗北したかという客観的な事実や原因を直視しないでそれを隠し、敗北の経験を省みることなく、中国戦線や他のアジアの国々を侵略し、ついにはアメリカとの戦闘に向かっていく。第一次ノモンハン事件の戦場やその周辺について通信社の記者をしていた詩人逸見猶吉は、取材をしていた。そして詩「海拉爾（ハイラル）」などが書かれた。二〇一一年に刊行された尾崎寿一郎『詩人逸見猶吉』の第二章「満州文学と日支事変」の中で、尾崎さんは半藤一利の『ノモンハンの夏』を要約し歴史的背景を述べながら、ノモンハン事件に遭遇した逸見猶吉の詩人としての過酷な宿命を伝えてくれている。

ノモンハン事件の年には、逸見猶吉は三十二歳だったが、田澤さんは四歳であった。第一詩集のタイトルにもなった「ロシア向日葵の咲いている家」は、そんな歴史となった満州の地で死んでいった父と家族が暮らす家の様子を淡々と書き記している。きっと半世紀以上が経ってようやく語られることもあるのだ。田澤さんの詩には、はるかな複雑な思いを秘めながらも率直に当時の情景を読み取ることが可能だ。田澤さんは家族と別れた父がどのように戦死したかを数え切れないほど想像し続けてきたに相違ない。そして父の死は永遠の謎として抱えこみ、元気だった父の最後の姿を思い出すたびに、家の周りに咲いていたロシア向日葵や朝顔を父に手向けるようにその美しさを反復してきたのだろう。「紅いコスモス」という二歳の頃を想起した詩は、母がお産の最中で家にいない間、父と五右衛門風呂に入り、蒲団の上で遊んでくれた優しい父の思い出を記したものだ。父がいなくても父の記憶で田澤さんは父の存在をいつも感じてきたのだろう。

田澤さんは父の死後に母や妹たちと弘前に帰ってきて、戦後には地元の大学を出て教職について定年を迎えた。その後に一九九六年ごろから地元の詩誌「むうぞく」や詩朗読の会「麗日の会」などで詩作と朗読を続けてきた。次に「初生け」という詩を紹介したい。

初生け

くすりゆびほどの大きさの
乳白色のはかまに
鋭く
とんがりに向かって走っている
みどり濃淡のすじたち
ボタニカルアートの線より
もっと細く澱みなく叙情的な
ほんものの繊細さ
を
しずかに掌に載せてみる
ねじれもなく　根元から

すらりと伸び
葉脈を浮き上がらせて
面に白粉を刷く
葉四枚のみごとな雅びやかさ
薄黄色の花片の中高に
縁どりを橙色に染め
微かに揺れ動く六弁の和花(わばな)
を
そっと　はかまから抜き外す
直(すぐ)な葉先に目を細め
半開きの蕾を
指で愛でたい衝動を抑え
深い想いを込めて
再び　はかまに入れ納める
花のすがたを
もっと自然を表す花のかたち
に

整えようと
午前の清(すが)しい空気の中
ひとり
煩悩を離れ
水仙二株を生ける
泊りの舟に
定まった位置を占めた花葉
やがて
凛とした気配が満ちて
初春の香気
が
立ち昇ってくる

00年1月10日

＊はかま＝茎の根元、泊り舟＝舟形花器

私は散歩をしながら野草や樹木の花々を見るこ

とが好きだが、その花を斬り取って花器に生けることは何か命を損うような思いがして、花を生ける人の心持ちが理解できないところがあった。しかし田澤さんのこの「初生け」を読んで、花を生ける人の心情が少し分かった思いがした。花を生けるとは、斬り取られた花をより自然に生かすために、心の煩悩を振り払い、一輪一輪の花や茎の形を真剣に直視して、その花の美しさとはどこなのかを問われながら、心を込めて花の香気が立ち昇るように花の命を生けることなのだと田澤さんは語っているように感じられた。田澤さんが花と真剣勝負をしている花を生ける時間は、きっと田澤さんの生き方を象徴しているのではないか。父とロシア向日葵を重ねているように、日々生ける花々を通して様々な想いを重ねながら、たった一日の時間の中にも美しい時空間があることを願って花を生け続けているのではないか。その意味で田澤さんは花を生けるように日常に中に言葉を美しく生かそうと詩作しているのかも知れない。

2

新詩集『四月のよろこび』は三章四十九篇の詩から成り立っている。一章「冬物語」十八篇は冬から始まり秋で終わっている。冒頭の詩「冬物語」の最後の五行は「あなたの中の暗い物語は／雪より冷たい／冬の霙(みぞれ)となって降りつづき／びしょびしょに濡れて／乾くことがない」と記している。「雪より冷たい冬の霙」を抱えながら生きる東北の人びとの思いを語っている。詩「藁(わら)」では、冬の間に木を雪から守るために天辺から放射状に張られている縄の結び目を斬り裂くと、春風に乗って藁くずとなって飛んで行くことを眺めている。詩「新春」では、新年に松竹梅を生けようとすると新春の光に包まれて新しい橋を渡る思い

を感じる。詩「希（ねがい）」では、古希を迎えた田澤さんご夫婦が春の山辺に咲く思い出の福寿草を探して散策する。「ひとは成熟するにつれて若くなる」という一行はとても意味の深い言葉だ。「雪暮色」、「寝坊」、「季節（とき）は春」、「桜の季節に」、「お花見」などは、東北人しか書けない春に憧れる思いに溢れた詩篇だ。また「散るこそ花」、「花菖蒲（はなしょうぶ）」、「燕子花（かきつばた）の四季」、「秋の花展」、「金鮎とオリーブ」、「花よ」、「狂い咲き」、「落葉の道を」、「いま夜明け」なども田澤さんが花の中で生かされていることを確認させてくれる思いがする。花に憑かれた詩人というと私の中では佐賀県出身で大阪の枚方市に暮らしていた福田万里子さんを思いうかべるが、その福田さんも戦中・戦後に父や妹を病で亡くして、福田万里子さんと似ているところがある。福田さんは岩絵の具で日本画を描いていたが、田澤さんは活け花を通して鎮魂の思いを表現してきたのだろう。花の詩の中から詩「花よ」を引用したい。

花　よ

あなたを好き
と　心の中で語りかける
あなたのすがたを
あなたよりもっとあなたらしく
表したい
あでやかな大輪を低く
こちらに向かせ
しなやかな若枝を
長く伸ばそう
要らないものは一切捨て簡潔に
あなたの持っている個性を
自分のおもいをも込めて表現したい

わたしの眼はときとして
花鋏を持つと厳しいものに
なるかも知れない

自分ひとりの静謐な世界
なんにも聞こえない
時間の流れていくのを忘れる

美しい対象に向かうと鳴り出す
共鳴の弦
感動をかたちにする
感性の閃き
現代にも生きている伝統の
技の習得が
自分には十分でない
と知りながらも
あなたに魅せられる

十月（あき）の澄んだ大気の中にあって
熱いこころで
わたしは
あなたを見凝めつづける

花の美を凝視して、どうしたら魅力的に花がより花らしい姿を見る者の前に立ち現れることが出来るかを自問している詩だ。花を選んだ時にその花が感覚的に好きだから選んだのだが、その一目惚れした花を人格があるように敬意を持って「あなた」として呼びかける。なぜその花が好きなのかを自らに問いかけながら、その花の個性をもっと引き出すためその花を見詰め続けている田澤さんの精神が伝わってくる詩であるだろう。

二章「四月のよろこび」十七篇は、田澤さんの人生観、詩的精神、東日本大震災を踏まえて他者

への思いやりなどが記された詩篇だ。詩「四月のよろこび」は、どんな困難な情況下でも新しい命は生まれてくる。大震災・原発事故の翌月の四月の困難な時期が続いていても無条件でその命を賛美し祝福すべきだと語っている。二章の冒頭に「秋不知（ときしらず）の花が咲いた日」という詩が田澤さんを語るには最も相応しい詩だと感じられたので、引用してみる。

秋不知（ときしらず）の花が咲いた日

朝食の後片付けをしながら
あ　笑窪
と思った
テレビに映っている女性（ひと）の顔
震災で家族を失った経験に触れ
将来の生き甲斐を語り
笑顔でいようと努めているだろうに
笑窪のそばを
涙が光って　流れていく

わたしはおもわず
自分の笑窪を人差し指でおさえる
笑窪は母の頬にあった
わたしに伝わり　娘にもある
ああ
遠くにいる孫娘にもあるはず
昨日　生まれたばかりの

大震災で家族を失った女性がテレビで涙を流している。その涙が笑窪のそばを流れていくことを見て、母にも自分にも娘にも孫娘にもある笑窪のことを思い出す。そして笑窪の存在に悲劇を超えて笑顔を取り戻そうとしている女性に人間の素晴らしさを垣間見ている。困難な時を乗り越えていくことは、前を向いて他者に笑顔で話しかけることが第一歩であることを田澤さんは物語っているのだろう。人は悲しい時に泣く存在であるが、しかしそんな困難な時を乗り越えるために、笑窪のない人であっても、自らの心の中にある笑窪を見つけ出して笑顔を取り戻すことが出来る存在であることを示している。田澤さん自身もきっと自らの顔と心の笑窪の存在に気付いて困難な時を耐えて乗り越えてきたように感じられた。

三章「見知らぬ花」十四篇は、日常を離れた旅の詩篇、歴史的な視野を持った詩篇、家族の詩篇などだ。最後に置かれている詩「見たことのない花」は、戦死した父を悼んだ詩だ。戦場となったノモンハン周辺に咲く「ノモンハン桜」の中で繰り広がれた悲劇を振り返り、遺骨となって眠っている父を偲んでいる。この詩を引用してこの小論を終えたい。戦争の悲劇は遺族の中に生涯残り続ける。戦争の悲劇を語り続けていこうとする人たち、これからも鎮魂の想いで花々を手向ける多くの人たちに、言葉に花の香気を生かし心に笑窪を宿す詩篇を読んでもらいたいと願っている。

見たことのない花

ノモンハン桜
見たことのない花
八月　戦場の草原に咲いたという

古稀を過ぎて
はじめてその名を聞いた

ノモンハン

行ったことのない土地
こちらは花の合間に伏せ
花を蹴散らしての戦い
あちらの戦車は花に踏み込んで
頭上から銃を撃った
国境のホロンバイルで父は戦死した
ノモンハン桜咲く高原は
無数の兵の血潮に染まった

「ノモンハン事件」は
太平洋戦争より前のこと
もう歴史に編み込まれた夏の戦い

何千もの遺骨はそこに留まり
郷愁の草花は　いまも
傍らに添って咲くという

田澤ちよこ詩集『四月のよろこび』栞解説文
鈴木比佐雄
コールサック社
2012